

記者発表資料

県庁教育記者クラブ

資料提供日：平成 25 年(2013 年) 7 月 30 日(火)

記者発表日：平成 25 年(2013 年) 8 月 6 日(火)

午後 1 時 30 分から

解禁日：テレビ・ラジオ・インターネット

8 月 8 日(木)17 時

新聞 8 月 9 日(金)朝刊

発表場所：現地(高島市安曇川町三尾里地先)

機 関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

担 当 者：企画調査課 副主幹 中村 健二

主 任 中村 智孝

携 帯：090-5461-3096

TEL：077-548-9780

E-mail：chosa@shiga-bunkazai.jp

件名

平成 25 年度 上御殿遺跡から出土した国内初の双環柄頭短剣の鋳型について

公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県高島土木事務所および滋賀県教育委員会からの依頼により鴨川補助広域基幹河川改修事業(青井川)に伴う天神畑・上御殿遺跡の発掘調査を平成 20 年度から実施しています。これまで、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代前期の石釧、奈良時代後半から平安時代初めにかけての建物・倉庫群、旧河道から奈良時代から平安時代の人形代、馬形代、斎串、陽物代などの木製祭祀具、「守君舩人(もりのきみのふなひと)」と書かれた墨書人名土器など興味深い資料が出土しており、これらの内容については、資料の提供、公開を行ってきました。

今年度 4,000 m²を対象とした調査で、国内初となる双環柄頭短剣(そうかんつかがしらたんけん)の鋳型が出土しました。双環柄頭短剣の鋳型は、全国的に類例がなく、さらに銅剣の出土の少ない近畿地方北部での鋳型の発見は、弥生時代から古墳時代初めにかけての青銅器生産の一端を明らかにする興味深い資料と言えます。

つきましては、今回出土しました双環柄頭短剣の鋳型をより多くの人々に、公開すべく、上記日程で記者資料説明会を開催しますので、その内容について、資料を提供します。

記

- (1) 遺 跡 名：上御殿(かみごてん)遺跡
 - (2) 所 在 地：高島市安曇川町三尾里
 - (3) 調査期間：平成 25 年(2013 年) 4 月～平成 26 年(2014 年) 3 月予定
 - (4) 調査面積：4,000 m²
 - (5) 調査主体：滋賀県教育委員会
 - (6) 調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- ①調査担当：企画調査課 副主幹 中村 健二

主任 中村 智孝

②連絡先：滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2

TEL：077-548-9780

FAX：077-548-9781

現場携帯 090-5461-3096

(7)一般の方々を対象とした現地説明会

①開催日時：平成 25 年(2013 年) 8 月 11 日(日)

第 1 回目 10 時 30 分、第 2 回目 13 時 30 分開催

雨天決行(ただし、警報が発令されましたら中止します)

②開催場所：高島市安曇川町三尾里

③交通機関：JR 安曇川駅より南に約 1 キロメートル

※自家用車の駐車スペースが非常に少ないため、公共交通機関の利用にご協力ください。

1. 調査の経緯

青井川の改修に伴う天神畑・上御殿遺跡の発掘調査については、平成19年に実施した試掘調査の結果に基づき、平成20年度2,700㎡、平成21年度3,800㎡、平成22年度2,250㎡、平成23年度2,450㎡、平成24年度5,000㎡、合計16,200㎡の発掘調査を実施し、今年度は4,000㎡を対象に、4月1日から実施しています。

今回、発掘調査を行っている場所は、昨年度調査地の北側に位置する地点で、調査面積は4,000㎡のうち約1,450㎡です（図1・2）。

2. これまでの資料提供等

- ① 「こけら経の出土について」 平成22年2月17日
一般公開 平成22年2月21日 安土城考古博物館 「あの遺跡は今Part10」
- ② 「大壁造り建物について」 平成23年5月9日
一般公開 平成23年5月15日 現地説明会
- ③ 「中世の馬具（轡）が出土」 平成23年7月15日
一般公開 平成23年7月24日 安土城考古博物館 「あの遺跡は今Part13」
- ④ 「古墳時代前・中期の木棺墓について」 平成23年10月18日
一般公開 平成23年10月23日 現地説明会
- ⑤ 「奈良時代後半から平安時代初めの居宅や人形代や斎串などを用いた水辺の祭祀跡」平成24年10月18日
一般公開 平成24年10月23日 現地説明会
- ⑥ 「石釧について」 平成25年2月4日
一般公開 平成25年2月9日～2月11日 イオンモール草津
平成25年2月17日 安土城考古博物館 「あの遺跡は今Part16」
平成25年2月21日～3月3日 高島歴史民俗資料館
- ⑦ 「滋賀県最多の馬形代と国内初の墨書人名土器が出土」平成25年7月10日
一般公開 平成25年7月21日 安土城考古博物館「あの遺跡は今Part17」

3. 調査の成果

1. 双環柄頭短剣の石製鋳型

1-1. 出土の経過

平成25年6月6日（木） 第21調査区北側（約500㎡）の中央付近の低地部分を人力掘削中に、地形が傾斜していく肩部より、石製鋳型（以下鋳型と略します）の一部を発見しました。全体を精査した結果、鋳型が上下2面（以下出土時上になっていた鋳型を鋳型（上）、下になっていた型鋳型を鋳型（下））が重なった状態であることが確認できました。

その後、鋳型が穴に納められていたかどうかの確認作業と出土状況写真撮影を行い、遺物出土状況図作成を行いました。

平成25年6月7日（金） 鋳型出土状況図の作成の続きを行い、終了後、鋳型（上）の取り外し、鋳型（下）の写真撮影と出土状況図の作成と遺物の取り上げを行いました。

1-2. 出土状況（写真1・3）

第21区（約500㎡）の北側中央付近の微高地から地形が低地へ傾斜する場所（微

高地との高さの差約 0.7m、地表下約 1 m) から短剣の掘り込み面(表面)を合わせた状態で上下 2 枚の鋳型が出土しました(図 2)。鋳型(下)は 2 つ、鋳型(上)は 4 つに割れ、鋳型の裏面が削られ、薄くなっています。鋳型が置かれた当時は、上下の鋳型が重なった状態にあったと推定できます。その後、後の時代に北東側からの削平を受けた結果、鋳型(上)は割れ、移動したと考えられます。

また、鋳型の周囲に穴が掘られた痕跡がないことや一緒に遺物が出土しないことから、上下合わせた状態で、傾斜地に単独で置かれていたと推定できます。このような上下 2 枚の鋳型が同時に出土する状況は、未完成の銅鐸鋳型が溝の中から 2 枚を並列に並べて出土した弥生時代中期後葉の兵庫県神戸市西神ニュータウン内第 65 地点(F 地区)遺跡の例以外は見つかりません。

1-3. 鋳型の特徴(図 4・5、写真 2)

鋳型(上)

大きさ：長さ約 29.5 cm、幅約 8.8 cm、厚さ 3.6 cm。

特徴：平面形はやや膨らみのある長方形を呈し、左側面は後の時代の削平によって一部欠損しています。側面は平滑に仕上げられており、右側面には段があります。表面の短剣の彫り込みは石材の中心より右側によっています。表面から上下側面と左右側面にかけて、十字に線が引かれており、短剣の彫り込み基準線と上下の鋳型を合わす際の合印を兼ねています。また、意味は不明ですが、短剣の関(まち)相当部分から 2.2 cm 下の剣身より左側に線が引かれています。また、鋒(きつき)部分にあたる部分の下面には鋒につながるように湯口と思われる凹みがあります。

短剣にあたる彫り込み部分は、全長約 28.5 cm、柄約 7.9 cm、剣身約 20.4 cm 以上、幅約 2.8 cm で、柄頭に付く双環の直径は外径 2.3 cm を測ります。柄が剣身より浅く彫り込まれています。柄は中心を縦位に引き、左側に複合鋸歯文を、右側には綾杉文を描いています。剣身の大部分には鎬(しのぎ)はなく、先端部分のみにあります。

ここに彫り込まれた短剣は柄と剣身を一回で鋳込む一鋳式のもので、鋳型に使用した痕跡はありません。

鋳型(下)

大きさ：長さ約 29.5 cm、幅約 8.8 cm、厚さ約 4.4 cm。

特徴：平面形はやや膨らみのある長方形を呈し、右側面は後の時代の削平によって一部欠損しています。側面は平滑に仕上げられており、左側面には段があります。表面の短剣の彫り込みは石材の中心より左側によっています。表面から上下側面と左右側面にかけて、十字に線が引かれており、短剣の彫り込み基準線と上下の鋳型を合わす際の合印を兼ねています。

短剣にあたる彫り込み部分は、全長約 28.5 cm、柄約 8.3 cm、剣身約 20.4 cm で、柄頭に付く双環の直径は外径 2.3 cm を測ります。柄が剣身より浅く彫り込まれています。柄は綾杉文を描いています。剣身の大部分には鎬(しのぎ)がありますが、切先に近い部分では一部消えています。

鋳型に使用した痕跡はありません。

上下短剣彫り込みのずれ

鋳型の上下を合印で重ねた場合、上下の鋳型に彫り込まれた短剣の柄の長さ

が違うため、柄頭にある双環にずれが生じます。このことから、鑄込みを行った場合、仕上げの段階でずれた部分を調整する必要があります。鑄型全体の彫り込みや湯口と考えられる凹みが下端面にある点から完成品とも考えられますが、柄の長さの違いや剣身の彫り込み具合から未完成あるいは失敗品の可能性もあります。いずれにせよ、鑄型表面の状況からこの鑄型は使用されなかったようです。

1-4. 石材

石材は、シルト岩（海底や湖沼底などに堆積した泥が岩石となったもの）です。九州地方の武器形青銅器の鑄型に使われる石材は石英長石斑岩で、朝鮮半島や中国東北部では滑石が多く、近畿地方では銅鐸の鑄型を含めて砂岩が多いことがわかっています。

1-5. 時期

鑄型を覆う層は、縄文時代中期末から後期前葉の遺構が掘り込まれる層よりは新しく、古墳時代中・後期の供献土器が含まれる層よりは古いことが層位として確認できます。このことから縄文時代後期から古墳時代後期までの間のいずれかの時期に相当します。

さらに、鑄型の短剣の柄に彫り込まれた綾杉文および複合鋸歯文や国内の武器形青銅器の製作年代を参考にすると弥生時代中期から古墳時代前期（BC 350～AD 300）の時期が考えられます。

1-6. 鑄型の類例

双環柄頭短剣の鑄型の類例は国内や朝鮮半島では現在確認されていません。弥生時代の銅劍鑄型は九州地方から瀬戸内地方を中心に出土しており、分布の東端である近畿地方でも兵庫県尼崎市田能遺跡や大阪府東大阪市鬼虎川遺跡などで出土しています。

1-7. 短剣の類例

上御殿遺跡の鑄型に彫り込まれた短剣の特徴は、剣身、柄、柄頭を一鑄しています。柄頭は双環で、柄には文様をもち、剣身は直刃で、脊（むね）や樋（ひ）がありません。一方、国内の弥生時代の細形銅劍、中細形銅劍、平形銅劍などは別鑄で、剣身は抉りや突起をもち、脊や樋があります（図6）。このような特徴は上御殿遺跡出土の鑄型に彫り込まれた短剣とは全く異なります。

こうした形状に類する短剣は、朝鮮半島にもなく中国北方（河北省北部、北京北部、内モン古中南部）地域の春秋戦国時代（BC 770～221）のオルドス式短剣（図7）と呼ばれる銅劍との類似性が認められます。しかしながら、上御殿遺跡の例は、柄部分に綾杉文と複合鋸歯文を組み合わせた文様が彫り込まれており、日本の銅鐸、武器形青銅器や中国東北部から朝鮮半島を中心に分布する多紐鏡に用いられる文様が入り入れられています。

さらに、鑄型を完成品と考えた場合、剣身にはオルドス式短剣にある鏢がなく、鏢が不明瞭で、扁平な点から考えると同形の鉄劍の剣身の断面形に近いといえます。したがって、オルドス式短剣そのものではないといえます。

このよう点から上御殿遺跡の鑄型に彫り込まれた短剣は、オルドス式短剣の後半（春秋時代後期から戦国時代初頭）の双環柄頭短剣をモデルとして、他の要素を加えて国内で作られたものと考えられます。

2. その他の遺構

本年度の調査では、縄文時代中期末から後期初頭の小穴、土坑、古墳時代前期・後期および平安時代の旧河道、奈良・平安時代の掘立柱建物4棟が新たに見つかりました。平安時代の旧河道には、木製の杭や板あるいは敷葉を用いた護岸工事が行

われていることもわかりました。

4. まとめ

今回出土した鑄型に彫り込まれた短剣は、朝鮮半島を通じて九州地方に伝わった銅剣とは全く別の系譜がたどられます。また、鑄型に使われた石材の産地は特定できません。九州地方や朝鮮半島の鑄型に使われる石材とは違うことから上御殿遺跡周辺を含めた近畿地方で製作された可能性が高いと考えられます。こうした状況や上御殿遺跡が位置する高島市は、日本海まで約 30 km の距離と近く、九州地方を経ずに日本海経由でオルドス式短剣そのものあるいはそれに関する情報が伝わった可能性も考えられます。しかしながら鑄型に彫り込まれた短剣とオルドス式短剣とは差異も大きく、日本海経由かどうかは、今後これらの間を埋める資料が見つかることによって、明らかになると考えられます。

今回の鑄型の出土によって、弥生時代から古墳時代初頭頃に九州地方の銅剣とは別系統の銅剣が存在することが明らかになり、銅剣は中国北方青銅器文化と関係することがわかりました。今回の鑄型は、弥生時代の青銅器文化研究に新たな一石を投じる資料であるといえます。

鑄型が低地に単独で上下合わせた状態で出土しました。すぐ近くには古墳時代中・後期と考えられる土器が墓に設置される供献土器のような状態で、低地に向けて出土しています。さらに古墳時代前期から平安時代まで連綿と水辺の祭祀を行っていることを考慮しますと上御殿遺跡出土の鑄型はその出土状況から水辺の祭祀に関する祭祀遺物と考えることもできます。

* 現地および資料についてご指導をいただいた方々

奈良文化財研究所	難波 洋三	埋蔵文化財センター長
九州大学	宮本 一夫	教授
愛媛大学ミュージアム	吉田 広	准教授
天理大学文学部	小田木 治太郎	准教授
九州大学	田尻 義了	准教授

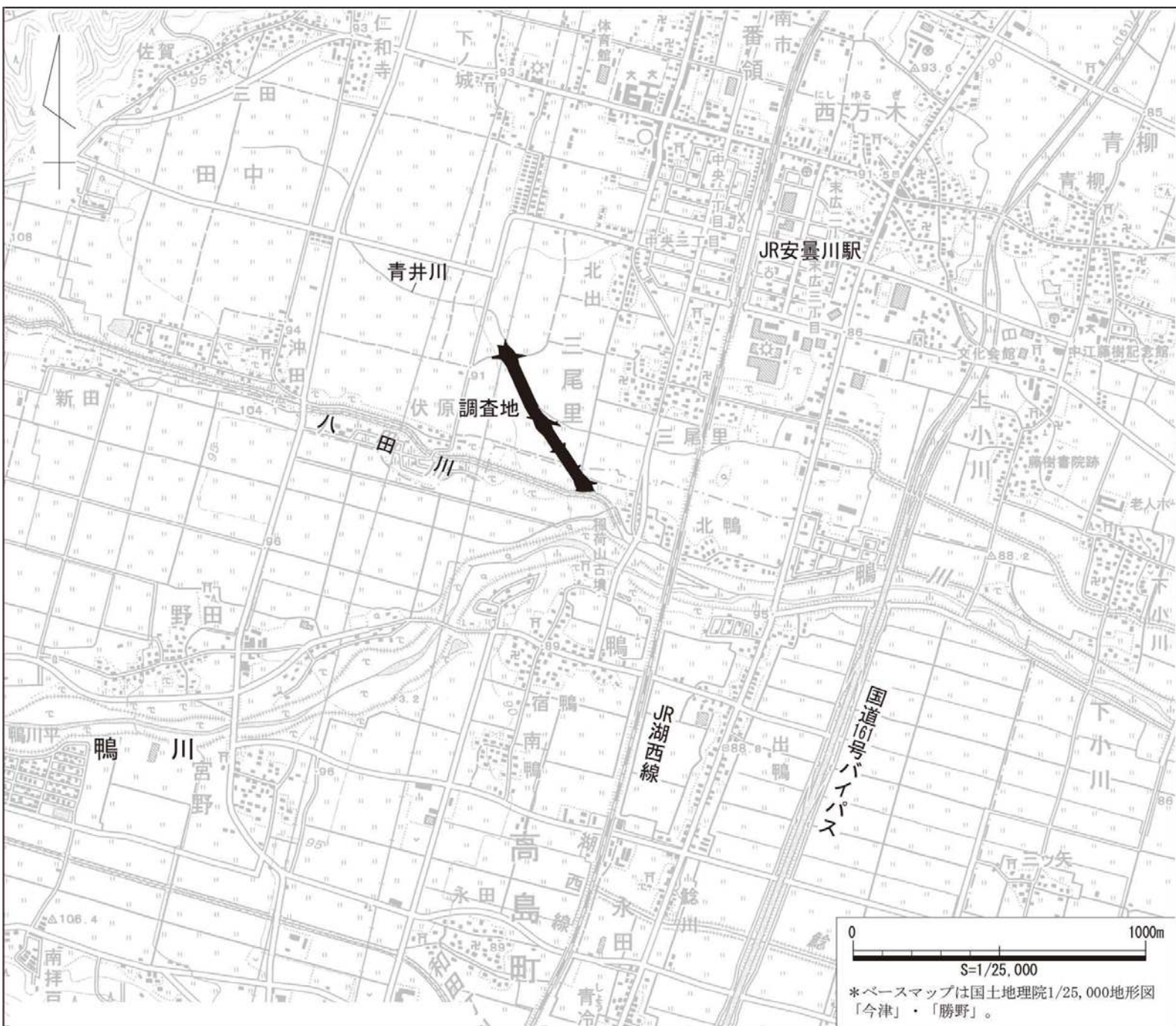


図1 上御殿遺跡の位置図

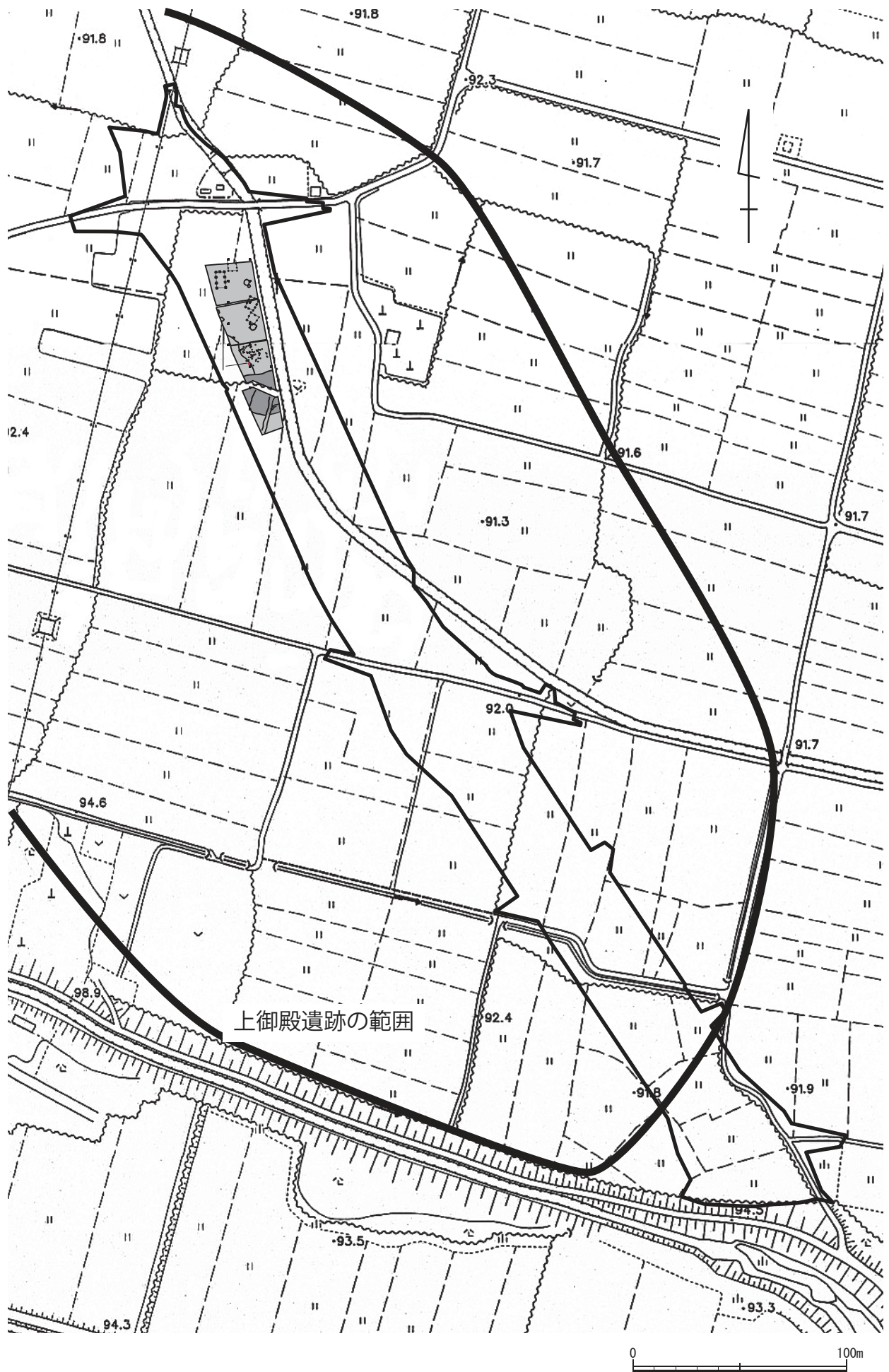


図2 上御殿遺跡 平成25年度調査地 位置図

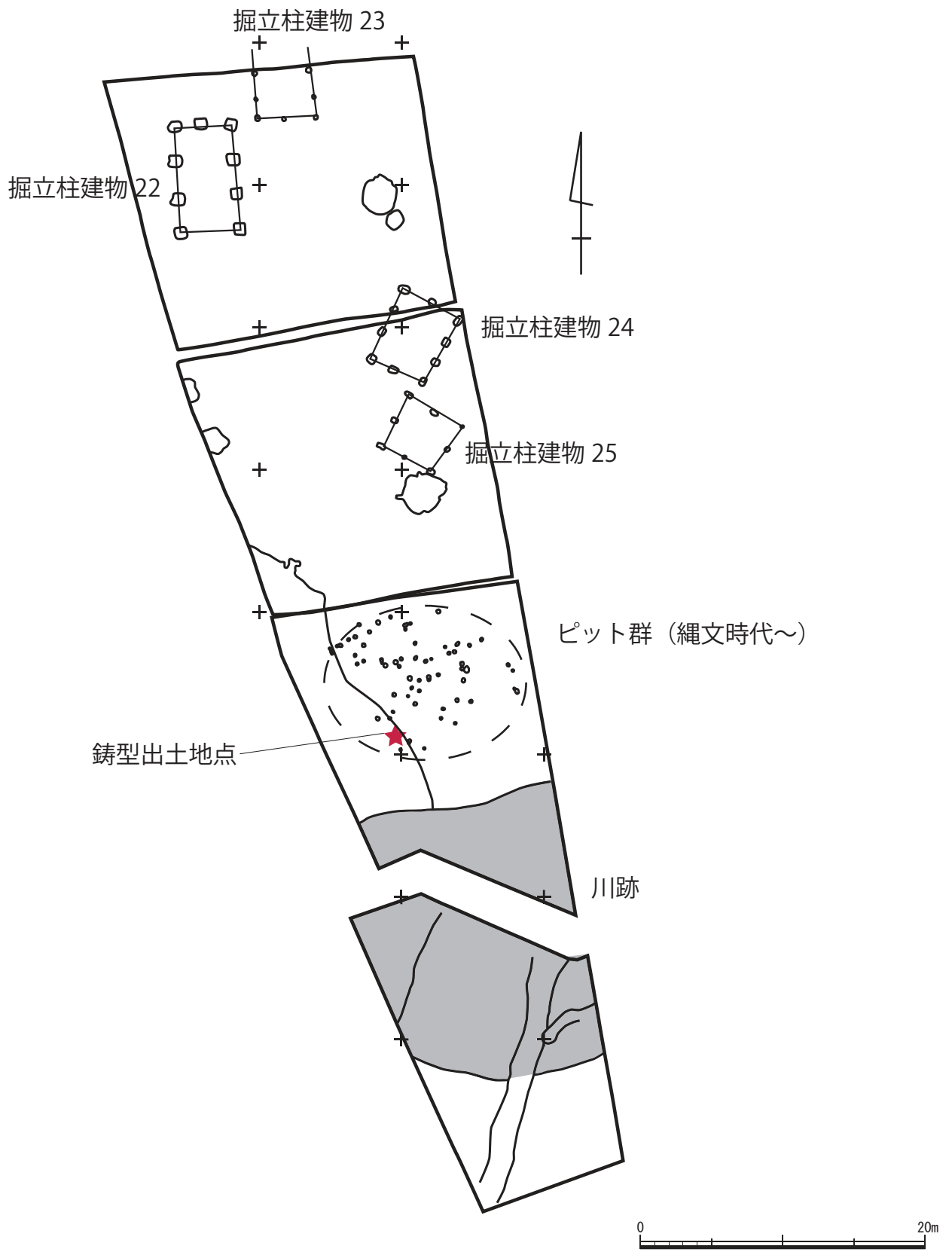


図3 主要遺構・鋳型出土地点 分布図



図4 鋳型部位の名称

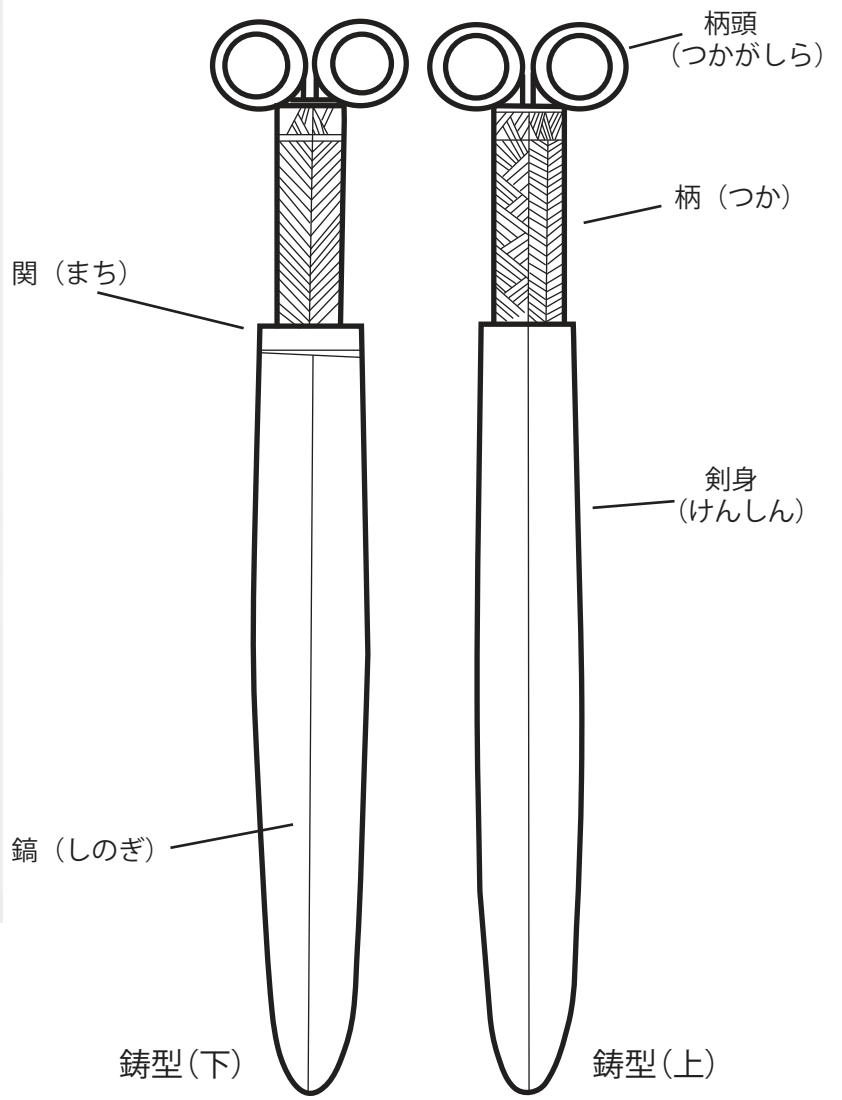


図5 復元短剣模式図と短剣部位の名称 (S=1/2)

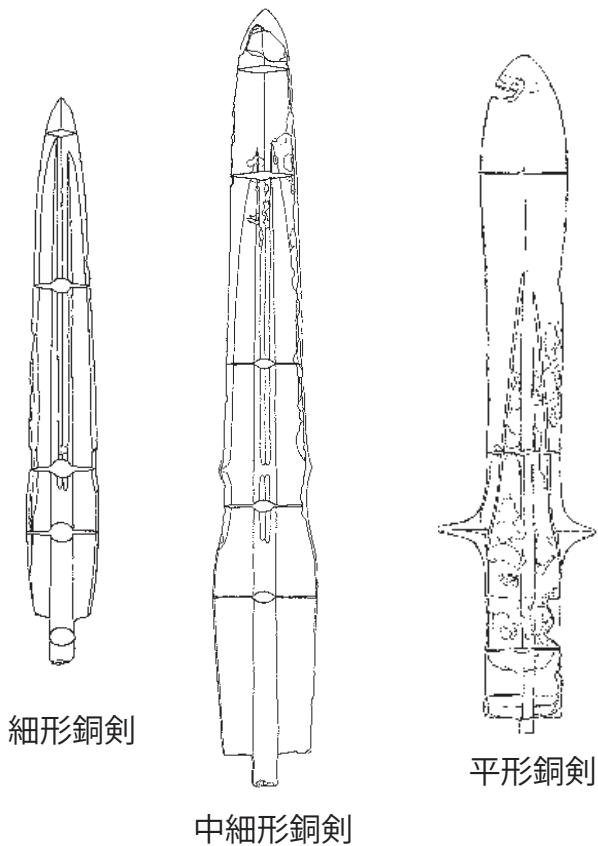


図6 国内出土の主要銅剣 (縮尺不同 吉田 2001 より抜粋)

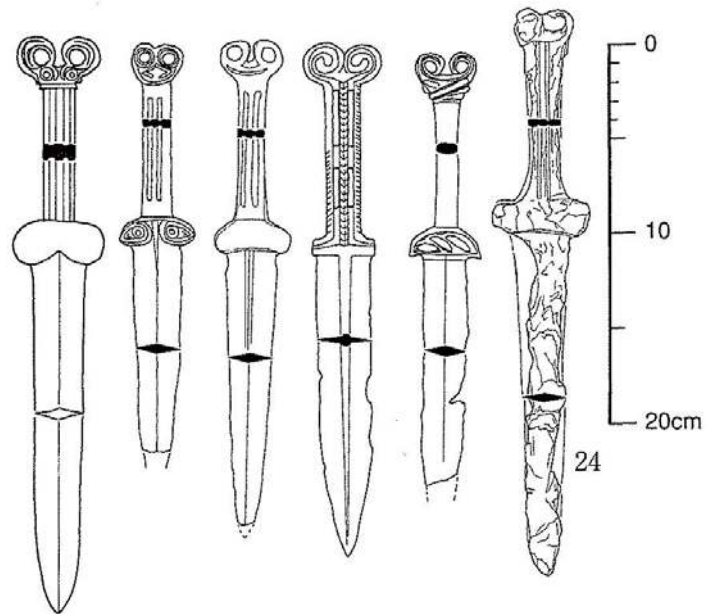


図7 上御殿遺跡と関連する オルドス式短剣 (町田 2006 より抜粋)



鑄型出土狀況



鑄型出土狀況
(上型除去後)



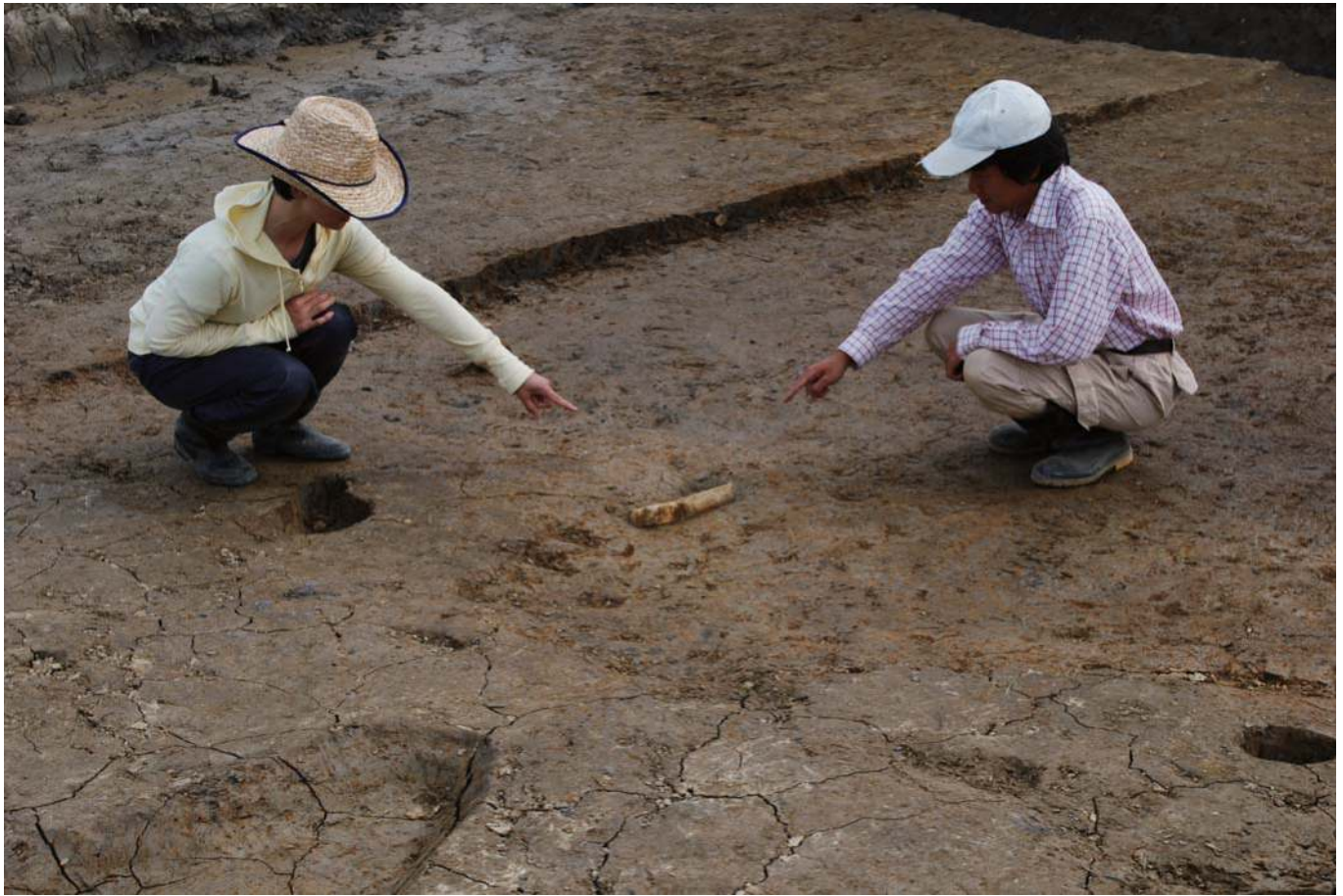
鑄型 (上)



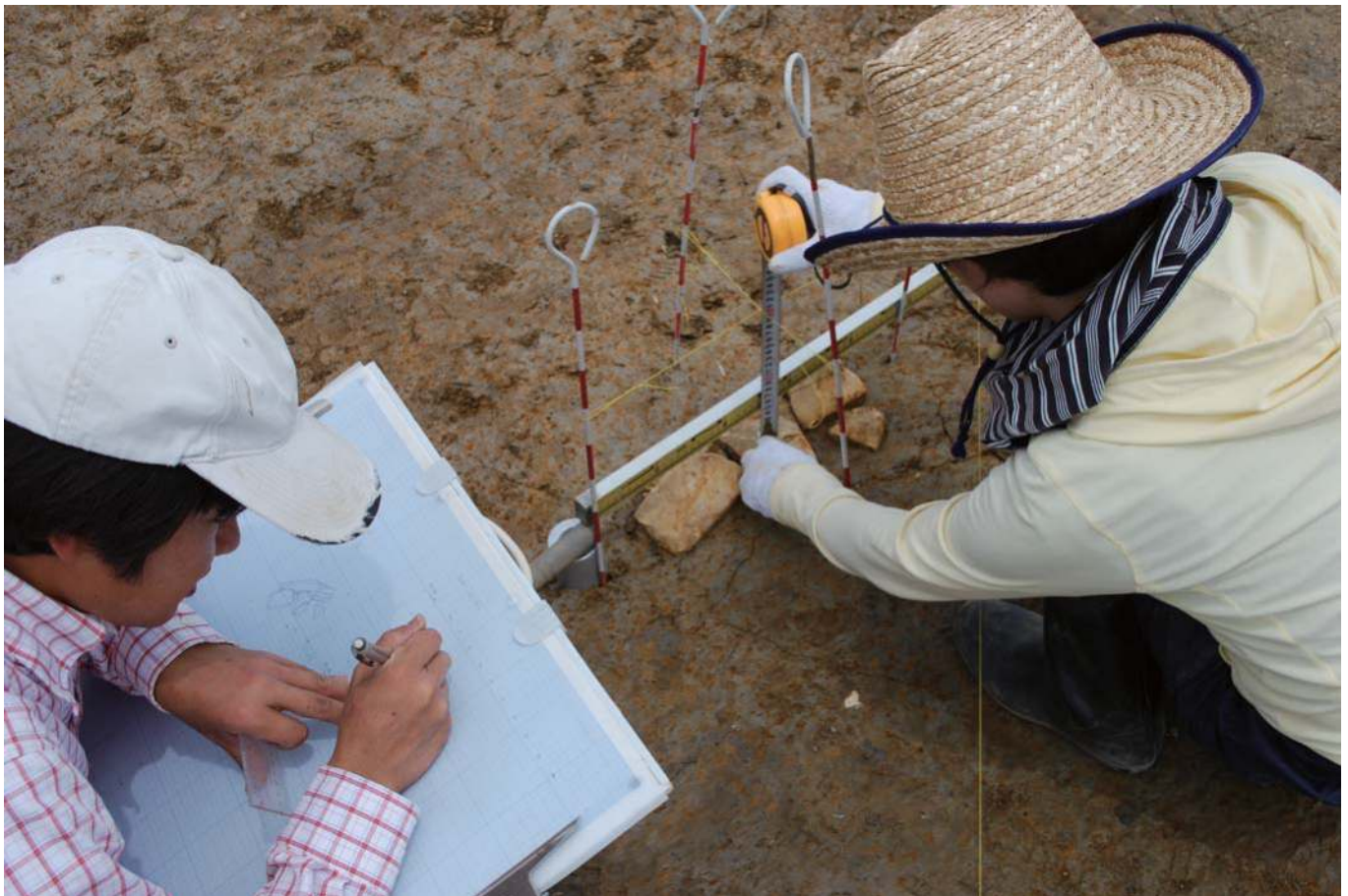
鑄型 (下)



写真2 双環柄頭短劍鑄型



鑄型出土状況



鑄型出土状況図作成状況

写真3 鑄型出土状況と記録化状況